

今回のテーマはブルース(Blues)です。ブルースという言葉は、音楽ジャンルだったり曲の形式だったり、色々な意味を含んでいて解説するにはかなり難物なのですが、穴だらけになるのは覚悟の上で書いてみます。書いているうちに長くなったので2回に分けてお送りします。1回めは名曲「セントルイス・ブルース」に見るブルースの特徴と魅力です。

本来の意味でのブルースは、アフリカ系アメリカ人(以下便宜上黒人)の間で、ミシシッピ州など深南部で19世紀末頃から歌われてきた曲の形式です。黒人霊歌やワークソング(労働歌)の形で受け継がれながら、次第にポピュラリティを得て、19世紀末には聴衆を前提として演奏されるようになっていったようです。

特徴としては12小節を基本の長さとして、その繰り返しで歌われ、演奏されることと、曲の調性を表すドレミファソラシドのうち、ミ、ソ、シの音を半音下げた音(ブルーノート)を使うのが特徴です(下げる場合とそのままの場合、両方があります)。

ブルースシンガー最初のスターはベッシー・スミス(1894-1937)です。建物を揺るがすとも言われた声量と、ブルース独特の悲しみや憂いを伴った歌詞の表現力で一世を風靡し「ブルースの女帝」などと呼ばれました。

◎音楽理論にない音とコードが生み出す「ブルージー」な魅力

スミス最大のヒット曲でもあり、ブルースナンバーの中で最も有名だと思われるのがセントルイスブルース(St. Louis Blues)です。1914年に、黒人トランペット奏者のW. C. ハンディがミシシッピ州を旅行中に現地ミュージシャンが演奏するブルースを聴き、楽譜化したと言われています。これが大ヒットとなり、この頃からブルースはポピュラー音楽の1ジャンルとして確立しました。

ベッシー・スミスが1933年にルイ・アームストロング(tp)と吹き込んだ録音を聴いてください。何とも物寂しいような憂いを含んだ音楽です。「ブルージー」という言葉がぴたりきます。ブルースが、虐げられていた黒人の悲しみや苦しさから生まれてきた音楽だと言われる事に思いを馳せてしまいますね。  
[https://www.youtube.com/watch?v=3rd9IaA\\_uJI](https://www.youtube.com/watch?v=3rd9IaA_uJI)

憂いを含んだブルース的と感じさせるのはブルーノートの使い方にあります。原曲はG(ト長調)ですが、分かりやすくC(ハ長調)にした譜面を付けたので見てください。ドレミファソラシドのうち、ミ、ソ、シがそれぞれ半音下がる(フラットする)のがブルーノートだと上で説明しました。ここではミの音に注目してください。最初の小節に2回ミが出てきますが(矢印)これはフラットしていません。一方、2小節目の矢印の音はフラットしています。6小節目、10小節目にも同じ音が出てきますが、これがブルーノートであり、独特な物憂い音の正体です。

<http://jazzlydian.com/mailmagazine/stlouisblues.png>

この曲の1小節目(C7)で出てくるミの音はフラットしてなくて、この曲の場合はここではブルーノートをせずに2小節目でブルーノートとしているのが効果を上げていると思いますが、ブルース一般にはここでもフラットした音が使われることも多いです。ミの音を半音下げると西洋音楽では短調(マイナーキー)になるのですが、ブルースの場合、C7というコードのミの音はフラットしていない、つまり調性としてはメジャーのままです。旋律だけを半音下げるという組み合わせになります。

コードの最も重要な構成音であるミはフラットしていないのに、旋律はフラットしている。不協和の要素なのですが、実際に聴くと不協和というより、多くの人が物憂いと感じる独特の効果を生み出します。しかも、黒人だけでなく我々日本人にも同じような音響効果をもたらします。この現象は西洋音楽の理論では説明がつかないため、様々な理屈づけが試みられてきたのですが、未だに結論は出ていません。音楽の面白く不思議なところだと思います。

コードに全部7(セブン)という記号がついていることも重要な点です。ここでのキー

(調)はCなので、普通の曲であればはCメジャー(ドミソ)というコードで始まりCメジャーで終わりますがブルースではこれにシがフラットした音を加えてC7というコードをつけます。

音楽理論では、C7というコードはFというコードに解決したくなるドミナントという機能を持つとされています。「起立、礼、直れ」の「礼」の部分で使われるコードと言えれば思い出せる方もいると思います。コードに含まれる「ミ」と「シのフラット」の音程が不安定なため、普通はすぐにFメジャー(ファラド)というコードに戻らないと気持ち悪くなるはずなのですが、ブルースではこれをCというキーの基本のコード(静と動の「静」)とするのです。2小節目で現れるコードも、本来Cというキーの4度(サブドミナント)ならFメジャー(ファラド)のはずですが、やはりミのフラットを加えたF7というコードがつかます。

動の要素を持った不安定なコードのはずなのに、それを基本のコードに位置づけて、動いた先も同じ不安定なコードとする、つまり1コーラス全部が不安定なはずのコードで構成されているのが特徴なのですが、それでいて、静→動→静という動きは感じられるのがブルースという音楽の特徴なのです。

#### ◎セントルイス・ブルースの魅力

数多くあるブルースの中で、セントルイスブルースが多くの人に好まれているのには理由があると思うので、少し分析してみましょう。ブルースの基本形式は12小節だと書きました。この音源では7秒のところで最初の歌詞「I hate to see」が歌われますが、これがコーラス(chorus)と呼ばれる曲のメイン部分(前掲の譜面)の始まりです。そして12小節の1コーラスが歌われ、2コーラス目が52秒付近から始まって1分36秒付近まで12小節続きます。12小節の1コーラスが2回繰り返されるのがAセクションということになります。

普通のブルースは12小節の繰り返しですが、この曲に関しては、その後2つのセクションが付け加わっています。1分36秒付近から2分31秒あたりまで16小節のBセクションが続きますが、ここではキーもマイナーに変わっていて、ブルーノートの物憂げさというより悲しみを感じさせる曲調に変化しています。その後12小節のCセクションが来るのですが、ここは最初の12小節のブルースのコード進行とは違ってG7ではなくGメジャーコードが使われ、明るさを感じさせる仕掛けになっています。

通常のブルースコードから始まり、途中で同主調のマイナーに転調し、最後はブルースコードを使わないメジャーコードで終わるといった曲調の変化が、この曲の魅力の一つだと思います。ちなみに、この音源でのスミスはDというキーで歌っています。

スミス以降、この曲がよく演奏されるようになっていきますが、アレンジや演奏スタイルは次第に洗練されていきます。スミスの吹き込みでも共演していたルイ・アームストロングはVelma Middletonというシンガーとも1958年に吹き込んでいますが、時代が進むとかなり洗練の度を深めています。ブルージーな感じはスミスの歌唱ほどにはあまり強調されなくなり、テンポが速くなっていることもあり、むしろ軽快な感じ、後半ではユーモラスな感じも出てきます。原曲と違いBセクションから演奏が始まっているのも変化した点です。

[https://www.youtube.com/watch?v=D2TU1Uwa3\\_o](https://www.youtube.com/watch?v=D2TU1Uwa3_o)

ナット・キング・コールの名唱も聴いていただきましょう。これもBセクションから始まっています。ビッグバンドのゴージャスなアレンジがなされていてカッコイイのに、ブルースフィーリングが残っていて、自分は好きな演奏ですね。やはりBセクションから歌い始めています。

<https://www.youtube.com/watch?v=cnLE5wsyHs4>

今回はジャズにおけるブルースの魅力と変遷についてお届けします。お楽しみに！